

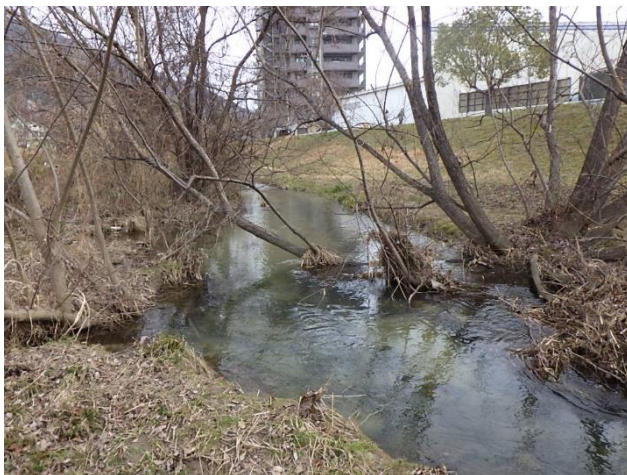
ひろしま県民いきもの調査 ～いきものログ講習会～
「早春ヤゴ観察会」報告
2025年3月8日（土）9：00～12：00



講師：坂本 充氏（環境省希少野生動植物種保存推進員）
：黒岩信宏氏（古川トンボしらべ隊）
：吉田亜希氏（古川トンボしらべ隊）
主催：広島県環境県民局 自然環境課

令和7年（2025年）3月8日、広島市安佐南区の市街地を流れる「古川」で、トンボのヤゴの観察会を行いました。「古川」は、かつては太田川の一部でしたが、江戸時代の始めごろ、洪水によって今のような太田川本流から離れた流れになったと言われています。

現在は「第一古川」と「第二古川」があり、太田川の高瀬堰から取り込んだ水が流れています。治水のため、堤防や護岸の工事が行われていますが、岸边に石を置いたり、川の流れを意図的に曲げるなどの多自然型の川づくりが進められた結果、多くの生きものがすみつき、市民の憩いの場となっています。



第一古川の景観



第二古川の景観

当日は、主に広島市内から家族連れなど計 11 名にご参加いただきました。講師は、環境省希少野生動植物種保存推進員で、広島市森林公園こんちゅう館の元職員の坂本充氏と、古川でトンボや水辺の生きものをほぼ毎週調査し、観察会も定期的に開催している「古川トンボしらべ隊」の黒岩信宏氏と吉田亜希氏にお願いしました。

観察会は、古川近くの佐東公民館の研修室に集まり、座学からスタートしました。全体スケジュールや講師の紹介などのオリエンテーションののち、スタッフから“ひろしま県民いきもの調査”と“いきものログ”について、内容の説明やスマートフォンへの登録方法などの説明がありました。



講師紹介（黒岩氏、吉田氏）

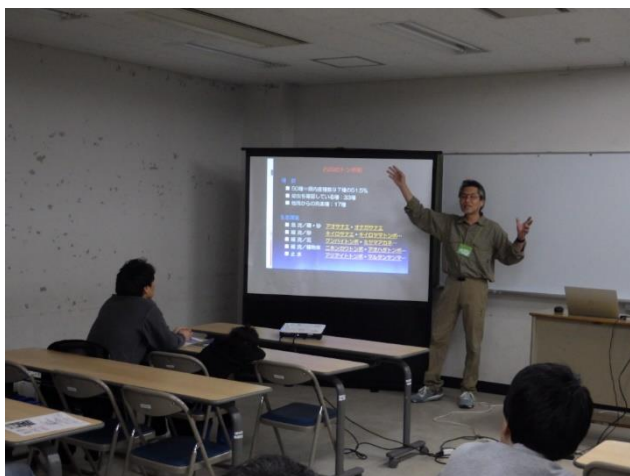


生きものログの説明

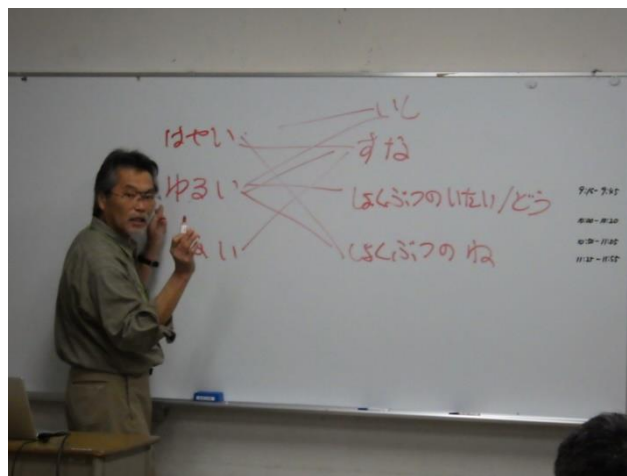
続いて、事前学習として坂本講師から古川環境とトンボについて解説していただきました。

「広島県には 97 種のトンボが生息しているが、そのうちの 50 種が古川に生息している。100 万都市の広島市内にある都市河川の古川に、なぜ多くのトンボがすみついているのか？」という問いかけから始まりました。

そして、古川環境特性について、「太田川や三篠川と違って石が少なく、砂が多い」、「川沿いにヤナギが多く生えている」、「流れの速い場所・遅い場所、流れがない止水環境、砂底・石底、植物がある場所などが組み合わさって多様な環境が作られている」などの説明があり、「このあと実際に川に入って、多様な環境ごとに種類の違うヤゴがすみ分けていることを体感してほしい」とのことでした。



事前学習 古川で確認されているトンボ



事前学習 多様な環境の組み合わせ

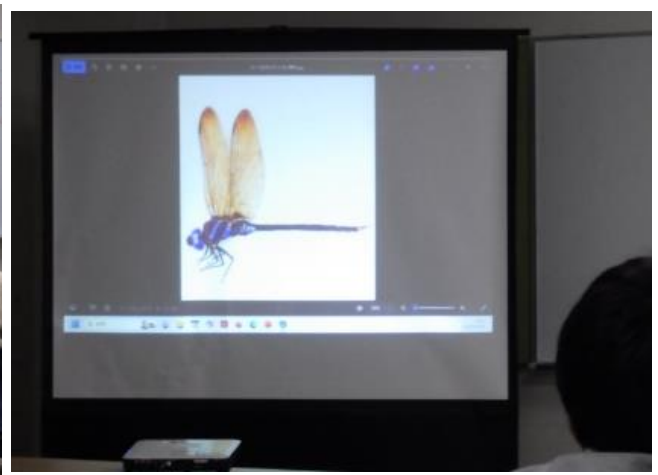
これまでの調査で見つかったトンボのうち、古川を特徴づける種類としては、次のようなものがあげられるということでした。

古川を特徴づけるトンボ

- アオサナエ：主に川の上流や中流にすむ。古川のような平地の下流域にすんでいるのは珍しい。
- ミヤマアカネ：赤トンボの仲間で唯一流れのあるところにすむ。小川のような環境が減っているので貴重である。
- アオハダトンボ：羽根がきれいな色のハグロトンボに似たトンボ。以前は観察のために江の川まで行っていたが、古川にたくさんいて驚いた。
- グンバイトンボ：ヤゴは丸い尾を持ち上げて敵を威嚇する。他の河川では少ないが、古川には高密度で生息し、優占種になっている。
- 止水性のトンボ：絶滅危惧種のアジアイトトンボや青い目が特徴的なマルタンヤンマも生息している。いずれも池のような止水にすむ種で、流水環境と止水環境が混在する古川の特徴を示している。



アオハダトンボの解説



マルタンヤンマの解説

そして、事前学習のまとめとして、「古川になぜ多くのトンボがすみついているのか?」。その理由を分かりやすく解説していただきました。

古川にトンボが多い理由

- 流れの多様性と健全性→速い流れと遅い流れが混在し、流れの違いで石底、砂底、泥底がある。
- 河川敷の多様性→岸辺のヤナギ林や豊かな植物帯（他の地域はシカの食害で植物が減少）。
- 近くに権現山、武田山、二ヶ城山がある。→古川で成虫が発生し、山に移動して成育する種がいる。反対に山の水溜まりで発生し、古川にエサを食べに飛来する種もいる。

公民館での座学が終わり、いよいよ古川での観察です。講師いわく、現地観察では「ヤナギ類の恩恵と水辺環境の多様性」をぜひみてほしいとのことで、実際に採集してみて「ヤゴの多様性と川の中でのすみわけ」を確認していただきたいとのことでした。

5分ほど街中を歩いて「第一古川」に到着。ここでは、まず流れの多様性について観察しました。

川幅の広いところは流れが緩やかで砂底、狭いところは流れが速く底に石が多い。岸辺のヤナギやエノキは成虫の休み場になり、水中に張り出した根は、流れに変化を付けるだけでなく、幼虫のすみ場所にもなっているとのことでした。



第一古川で河川環境の解説



岸辺に生えているヤナギ類

ヤナギ類の観察場所から少し下流に下がり、浅場が広がっているところへ移動。「第一古川」の採集場所です。参加者に採集用の網とバケツを配布し、網の使い方についての講師からのレクチャーがありました。

「網は下流側で受けて、上流側の底を足で”ガサガサ”してヤゴを流し込むようにする」、「バケツの水は”ひたひた”ぐらいでよい。水が多いとヤゴが活動しやすくなり、共食いする」、「種によっている場所が違うので、色々な環境のところを探るのがよい」など、ヤゴ採集のノウハウを教えてくださいました。

ヤゴの採り方のレクチャー後、参加者の皆さんは、「第一古川」の思い思いの場所に入って行きました。川の中では、黒岩講師、吉田講師が参加者と一緒に採集を行い、実践指導していただきました。当日はいつもよりヤゴが少なく、簡単には採集できない状態でしたが、その分、参加者の皆さんは、夢中になって色々な環境の場所を熱心に探っていました。



採集方法の実践指導



第一古川での採集風景

第一古川では、コヤマトンボのヤゴが見つかりました。コヤマトンボは、流れがあり、草や砂泥底に生息します。成虫になるのに3年間ほどかかるので、卵から生まれた年が異なる、大きさが違う3世代が見つかるそうです。今回は、昨年生まれの小さなヤゴを見つけることができました。



見つかったコヤマトンボの小さなヤゴ



コヤマトンボの解説

続いて、今度は100mほど離れた「第二古川」に向かいます。「第二古川」は水量が少なく、流れがほとんどない止水域のような環境で、泥底が多いのが特徴です。

ここでは、コヤマトンボの大きなヤゴ（終齢幼虫）やグンバイトンボ、タベサナエ、シオカラトンボ、ショウジョウトンボのヤゴが見つかりました。見つかったヤゴは、それぞれ体形が異なっています。草の根際、落ち葉の中、泥の中など、種類ごとにすむ場所を変えて、水中でうまくすみわけているので、それに適応して体形に多様性が出ているとのことでした。



第二古川での採集風景



大きなコヤマトンボのヤゴ（終齢幼虫）

古川での採集が終わり、捕まえたヤゴを持って公民館に戻りました。室内でヤゴの体の細かな観察を行い、すみ場所と体形の関係や種類を判別するときには触覚の形を見るとよいことなどを解説していただきました。

「第二古川」で見つかったヤゴのうち、タベサナエ、シオカラトンボ、ショウジョウトンボは本来ため池に多い種類で、「第二古川」はほとんど流れがないので、これらの種がすんでいるそうです。また、ゲンバイトンボやコヤマトンボは、流れのあるところと流れのないところの両方に広く生息できるとのことでした。

触覚は、サナエトンボの仲間はしゃもじのように平たい形ですが、シオカラトンボ、ショウジョウトンボ、コヤマトンボは細長い形をしています。参加者の皆さんは、シャーレの中にある実物のヤゴを細かく観察し、子供たちは手に取ってヤゴの感触を体験していました。

ちなみにトンボの成虫の分類は、羽根にある脈の特徴を見て判別するそうです。



ヤゴの解説と古川の環境の振り返り



ヤゴの細かな観察



見つかったヤゴ

室内での事前学習、学んだことを実際に川辺で見て、川に入って体感する、再び室内に戻ってヤゴの多様な体形を観察し、見つかった場所の違いからその理由を思い描く。

3時間ほどのヤゴ観察会でしたが、市街地にある身近な小河川が、県内でも有数のトンボの生息地であり、その豊かなトンボ相は、多様な水辺環境によって育まれているということに対して、参加者の皆さんの理解が深まったのではないのでしょうか。